

栗山英樹という名前をご存じの方は、ある程度プロ野球に精通している方であろう。北海道日本ハムファイターズの監督である。私は、この栗山英樹さんにずっと関心があった。2012年から監督となり、今年で9年目となる。長い。この間に、大谷翔平、清宮幸太郎、吉田輝星と次代を担うスター候補をドラフトで指名してきた。大谷選手の二刀流は、今となっては当たり前のようになっているが、ここまでくることができたのは、今の栗山監督のおかげである。

栗山監督は、元プロ野球選手ではあるが、国立大学の東京学芸大学出身である。珍しい。選手時代にはそれほど目立った実績は残してはいない。引退後は、スポーツキャスターとしてテレビなどで活躍していた。

北海道日本ハムファイターズという球団は、なぜ栗山さんに監督を依頼したのだろうか。当時の球団GMは「栗山さん、命がけで野球を愛してやってくれば、それでいいのです」と言ったそうである。栗山英樹という人の実績ではなく、人物を見たのではなかろうか。

この栗山監督が書籍を出版した。タイトルは『栗山ノート』である。私はやっぱりと思った。ノートをつけているタイプの方だと思っていた。当然何が書かれているか気になる。普段は文庫本か新書しか買わない私が迷わずこの本を手にした。

するとこれも予想通りであった。栗山監督は野球以外のことも勉強していた。指導者として何の実績もない立場でチームを率いることになった栗山監督は、古今東西の古典を中心に読書を進めていく。監督として、仲間として、人間として、チーム内でどのように振る舞えばよいのか。野球ノートをつけることと、読書の旅を並行していくと、野球を野球の常識だけで読み解くべきではない、という思いに辿り着いたそうである。野球ノートは、「四書五経」などの古典や経営者の著書から抜き出した言葉で埋め尽くされている。野球ノートというよりも人生ノートと言ったほうがいいのかもわからない。

『栗山ノート』に次のことが書かれてあった。

江戸時代後期に禅僧や歌人、書家として名を馳せた良寛は、『戒語』を言い残しました。文字どおり戒めの言葉です。『戒語』の中の言葉です。

しゃべり過ぎる。相手の話に口を挟む。負け惜しみを言う。心にもないことを言う。手柄話や自慢話をする。減らず口を叩く。話の腰を折る。自分では気が付かないうちにやってしまいそうなものばかりです。

私が気を付けているのは、相手の話を聞くことです。話を聞くということは、相手の思いに触れることです。選手の話はできるだけ聞くようにします。聞き手にならなければ、相手の悩みや苦しみに近づくことはできません。

私に悩みを打ち明けたからといって、選手の心が晴れるわけではない。野球のことならともかく、家族、家庭、友人関係の悩みなどは、できることが限られます。何もできないかもしれない。それでも、話を聞いてもらうことで気持ちが落ち着いたり、心の重荷をほんの少し下ろしたりすることにはつながります。

教員も同じであろう。教員ならば教育書を読むことが多いと思う。しかし、教育以外のことからヒントを得ることが多いのも事実である。人生論や生き方に関しては、職業はあまり関係ない。むしろ経験を積んできた教員ならば、教育書はもちろんこと、人生や生き方をテーマにした書籍を読むべきである。それが研究と修養のうちの“修養”の一つであろう。